

小田八幡神社の伝説

ずい分と昔から小田の村人たちは、この場所に神さんをまつておったんじや。小田に城が築かれてからはお殿さんが社殿を大きく新しくなされたそうじや。

今から四百年前、椋梨村に、小早川家を一つにまとめるための、八幡神社があつてのお、それが焼けたんじやそうな。夏に焼けたので、その場所を夏焼けというんじやが、そのとき小田の村に作兵衛という強力の者がいて、猛火の中に飛び込んで御神体を持ち帰ったんじや。伝えるところによると近くの五ヶ村はそれぞれに御神体を持ち帰ったそうで、小田は太鼓をもち帰ったと伝えられておるんじやがお。それを一時置いた場所をおろしこの森というて、今の小田農協の倉庫があつた所にほこらがあつたそうじや。

次の春には、京の吉田にある八幡神宮に上つて御神符をいただいて帰ってきたんじや。

ちょうど下河内にまでもどつてきたところ、雨がひどく洪水のため、一夜泊ったそうじや。今でも下河内に一夜泊った所があるそうじや。次の日、洪水のために橋が流れて渡れないので、御神符をかかげて祈願すると、濁流の中から大蛇が現われて、皆を背に乗せて案内してくれたので、むこう岸に無事渡ることができたんじや。

土地の人達は、そのありがたい神の徳を感じたので、その神様をお祭りしたという事じや。今でも、わらで大蛇を形づくつておそなえするときいておるがお。



河童の力

小田にも河童の話があります。

ある夏のことです。河童がええ気持ちで昼寝をしておると、頭の皿が乾いてしまつたんでしよう、力が出んもんですから、村の老人になんなくつかまえられるしもうたわけがなす。

老人は家の石うすに、河童をつなげて「河童じや、乾からびた河童じや。」とはやしたそうじや。珍しいもんじやから、来るわ来るわ、家の前に行列ができるほどじやつた。「こりやあ、ええもうけになるわい。ひとつ見世物小屋でも建てようかい。」と、一もうけをたくらんでおりましたんじやが…。

「水を下さい。水を下さい。」と、河童の弱々しい声がきこえてのお。老人は、河童に水を与えると馬の力が出ることを知つておつたもんで、ここは一つからかつてやろうと、「ほうら、頭の皿へ水をかけてやろう。」と空のヒシヤクをふつたそうじや。

まんが悪いとはこの事じや。そのひしゃくに水滴が残つとつたんじやろうのお。ポタポタと河童の頭の皿に水がのつたんじや。

見る見る河童の体は緑色に輝いたかと思うと、力が沸き上がつて来ましてのお。軽々と石うすを引っぱると、逃げて走り去つてしまつたそうじや。魚切までくると淵の上から飛び込んだんじやが石うすが大きな穴をあけてのお。今でもちゃんと残つとります。

わしが子供のころは、淵で泳ぐと冷えた体をこの穴の温い水で温めたもんですよ。

ダムができましたのお。どうなつておるんか。河童もわるさをするとかいう話もきいておりませんのお。

